

短期モデルと長期均衡モデル

短期モデルと長期均衡モデルは、二つの極端を示している。それらを比較することによって、マクロ経済政策をどのように実施すべきかについて判断する手掛りが得られる。

I. 短期モデルと長期モデルの違い

A. 価格の需要供給調整に要する時間

1. 価格変動を妨げる諸要因
 - a. 制度： 契約による価格の決定
 - b. 技術： 在庫の可否、価格改定の費用
 - c. 情報： 現状の把握、将来に関する予想
2. 財サービスの種類による相違

B. 固定価格モデルと伸縮価格モデル

1. 短期モデル： 固定価格モデル
2. 長期均衡モデル： 伸縮価格モデル

II. 短期モデル —「ケインズ」モデル

A. 価格変動を含まない IS-LM モデル

1. 生産物の需要供給均衡（経済の実物面）
2. 貨幣の需要供給均衡（経済の貨幣面）

B. 総需要曲線、総供給曲線による分析

1. 水平な総供給曲線
2. 総需要曲線の位置による GDP の決定

III. 長期均衡モデル —「古典派」モデル

A. 経済の実物面と貨幣面が分離したモデル

1. 実物面の条件による実質 GDP の決定
 - a. 生産技術の条件
 - b. 人々の好み（選好）の条件
2. 貨幣の中立性

B. 総需要曲線、総供給曲線による分析

1. 垂直な総供給曲線
2. 総供給曲線の位置による GDP の決定

IV. マクロ経済政策

A. 政策を実行する際に検討すべき問題

1. 価格の働きによる雇用回復をいつまで待てるか。
 - a. 時間がたてば、景気、雇用は徐々に回復する可能性がある。
 - b. 不況、大量失業の持続は社会にとっての損失である。
2. 財政政策については、赤字の過度の累積を避けられるか。
 - a. 有効需要政策の投資誘発効果は十分にあるか。
 - b. 経済が成長し続けるか。

- B. 深刻な不況時の問題： 価格が伸縮的であっても市場による解決不可
 - 1. 流動性の罠
 - a. 資産需要が極端に貨幣に偏る（貨幣需要の利子率弾力性が極めて大きくなる。）
 - b. 結果として、マネーサプライが増加しても利子率が下がらない。
 - 2. 投資支出の利子率弾力性の低下
 - a. 投資への利子率以外の要因の影響が大きい。
 - (1) 過剰資本ストック
 - (2) 悲観的な予想
 - b. 結果として、利子率が下がっても投資需要が増えない。

参考文献

教科書。第 3 章、第 8 章、第 9 章。とくに 58-72, 214-232, 240-241 ページ。